

「秋の土づくり運動」 9月15日～11月15日

高品質・安定生産に向け、
この秋「土づくり」に取り組みましょう！

健全な土は、高品質アルプス米の生産に必要不可欠です。
次年度の米づくりのため、秋からしっかり土づくりを行いましょう。



1. 土壌改良資材の継続的施用

JAアルプス管内の土壌の特徴は、土壌pHが低く、ケイ酸分が不足しています。不足分を供給できる土壌改良資材を施用しましょう。

表1 土壌改良資材の標準施用量と施用効果

資材名	10a当たり施用量	ケイ酸分(%)	アルカリ分(%)	特徴
粒状ケイカル	200kg	30.0	44.0	ケイ酸を供給して茎や葉が強くなる 倒伏やいもち病に対して抵抗力が増す
元 気	100kg	24.0	32.0	ケイ酸、苦土の他、有機質15%入り
シリカロマン	100kg	25.0	45.0	ケイ酸の他、鉄、リン酸、苦土が一度に供給可能
シンキョーライトP	100kg	(66.1)	—	天然ミネラルを含み、根張り促進、保肥力の改善

2. 秋耕しの実践

稲わら・もみ殻のすき込みを、気温の高い10月中に行いましょう。なお、すき込む深さは5～10 cm程度の浅めにするとともに、秋耕後は排水溝を設置して、圃場の排水を促し、腐熟を促進しましょう。

貴重な有機資源である
稲わら・籾がらは、必ず土壌
に還元しましょう。
また、秋耕しをした上で、
春耕しをすることにより、
深耕が可能になります！



3. 有機物の施用

有機物の施用により、土壌の腐植を増やし、保肥力を高めましょう。稲わらのすき込みに加え、特に腐植の少ない圃場では堆肥を積極的に施用しましょう。なお、堆肥確保が困難な地域では、発酵鶏ふんの施用や緑肥作物の栽培・すき込みを行いましょう。

表2 堆肥施用の目安(秋施用の場合)

資材名	施用量(10a当たり)
発酵鶏ふん	100～150kg
牛ふん堆肥	1～2t
豚ふん堆肥	1～2t

今年度管内で
目立った病害

「ごま葉枯病」～葉にごま粒状の病斑がでます。～

この病気の発生は、土壌条件や稲体の栄養条件と関係が深く、生育後半に稲体活力が低下した場合や、土壌養分である「ケイ酸」、「カリ」、「鉄分」などが少ない圃場で多発します。
特に今年度発生が見られた圃場では、積極的に「土づくり」に取り組み、ごま葉枯病の発生抑制に努めましょう。



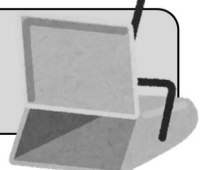
表3 緑肥作物(冬作物)

作物名	播種時期	播種量
ヘアリーベッチ	水稻収穫後～10月中旬	3～4kg/10a
レンゲ	水稻収穫後～10月中旬	3～4kg/10a

<栽培上の注意点>

- ヘアリーベッチ、レンゲとも肥料は不要です。
- 初期の湿害に弱いので、排水対策を実施してから播種しましょう。
- 播種時期が遅れると生育量の確保が困難になるため、出来るだけ早い時期に播種しましょう。

～農作業機械で道路を汚したら、必ず掃除しましょう～



～GAPで農業経営をより良いものにしよう！～

1 GAP (Good Agricultural Practice)とは

良い

農業の


実践

「安全な農産物の生産」、「環境の保全」、「農業者の安全確保」の視点から、農作業事故や農薬残留違反といった農業生産活動における事故や事件の発生の未然防止など「良い農業」を行うための持続的な改善活動です。

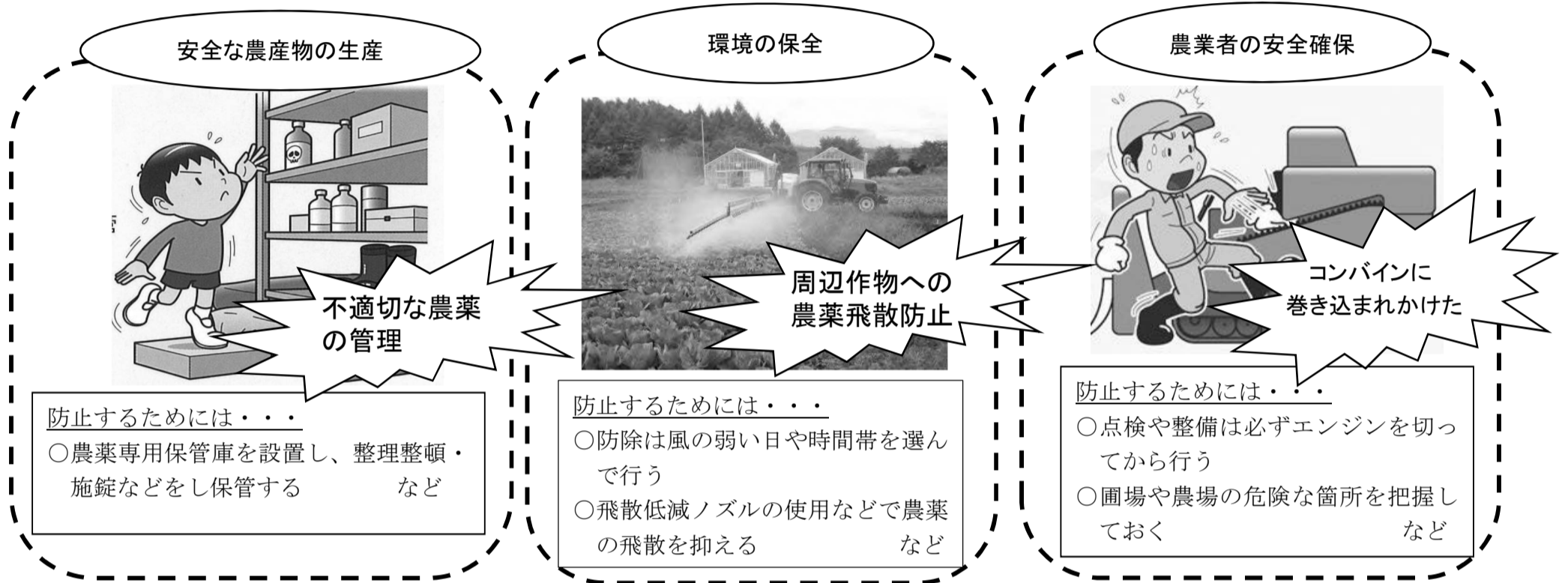
「GAP」に取り組むことは、自分自身の安全と経営を守り、経営発展へつながります。

GAP (ギャップ)

安全な農産物の生産 + 環境の保全 + 農業者の安全確保



GAPはあなたを守ります！



2 GAPの取組手順 ～BAP (Bad Agricultural Practice)を改善する！～

悪い

農業の

実践

①自己点検(気付き・発見)

「GAP チェックシート」に基づいて、自らの作業が法律違反や事故等につながる問題点(BAP: バップ)がないか確認しましょう。

(「GAP チェックシート」は、生産記録簿の裏面やとやま GAP 自己点検シート(ホームページ参照)のものを活用して下さい)



②改善・実践(考え・共有)

自己点検で気付いた問題点について、改善に必要な取組や農場ルールを考え、関係者で情報を共有しましょう。



③点検(確認・評価)

あらためて、BAPが改善されているか点検しましょう。複数人での点検・評価が、BAPの漏れや見落としを防ぎ、GAPへの近道になります。



さらに、自らの農場を第三者(JA、農林振興センター)に点検してもらってはいかがでしょうか。

【お知らせ】 JAアルプスでは、11月11日(水)に農業用廃プラスチック類・廃棄農薬の回収を行います。回収場所は、立山、上市、滑川営農経済センター(配送)です。詳しくは、『広報アルプス 10月号』でご確認ください。